

中学1年生における不登校の問題と改善策 — 集団形成からの分析 —

安藝 優介 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)
指導教員 黒澤 寛己

キーワード：不登校，中一ギャップ，集団形成

1. 諸言

本研究は「中1ギャップ」による不登校を減らすことが目的である。そのため、不登校に対しては集団形成が有効であるとの仮説を立て、学校における生徒の居場所づくりに焦点を当てる。

平成27年度の中央教育審議会の調査によると、小学校・中学校において不登校生徒の数が、前年の122,897人に対し、126,009人と約3,000人増加している。また、千人当たりでは12.6人となっている。

不登校生徒数は中学生になると、小学生に比べ急激に増加している。その原因として、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活にうまく適応できずにいることがある。これを「中1ギャップ」という。

そこで、本研究では「中1ギャップ」による不登校を減らすために、集団形成が有効であると考え、学級、行事、部活などに焦点を当て、生徒の居場所を作ることを目的とする。

2. 研究方法

「不登校」については、笠井孝久(2001)、「中1ギャップ」については、渡辺弥生(2015)などの資料、文献を中心に、先行研究や調査結果の分析を行った。

3. 結果と考察

資料、文献、先行研究の調査の結果、「中1ギャップ」における不登校の要因として、学級内での影響、行事の影響、部活動の影響、の3

つがあることが分かった。このことに対して、まず、学級内では安心して学校生活を送ることができるように各生徒の考えを尊重することが大切であると考ええる。

次に、行事では、人間関係を再構築できることから、苦手な行事でも仲間と積極的に取り組むことが大切と考える。

最後に、部活動では、教師・主将・部員の関係性が大切であることが明かとなった。そのため主将を決める際には多くの話し合いを行い、部員が納得した上で主将を決めることが、大切であると考ええる。

4. まとめ

資料・参考文献の調査の結果、中学1年生における不登校の指導については、部活動・学級・行事において集団形成、つまり居場所をつくることで不登校児童生徒を減らせることが明らかになった。

今後の課題としては、部活動、学級、行事での居場所をつくったうえで、地域、家庭と連携を取り、学校外での居場所をつくることが大切だと考える。

引用・参考文献

笠井孝久(2001)不登校児童生徒が期待する援助行動. 千葉大学教育学部研究紀要 I 教育科学編. 49 : 181-189.

渡辺弥生(2015)中1ギャップを乗り越える方法. 宝島社. 14-63.